

一檜原村の炭焼き一 (6)

(記 岡本)

低山歩きをしていると、山道端に底の浅い鍋型の大きな窪地を屢々眼にする。最初窪地を見つけた時、何だろうと不思議に思った。実に半世紀前に日常生活で炭との縁が切れていたのに、咄嗟に炭焼き窯の跡だとは思いつかなかった。炭焼き窯の跡だを知ってから、見つける度に子供の頃に新聞紙と蒲鉾板を用いて炭燻しの手伝いをしたことや炭火鉢で餅を焼いたことなどが懐かしく脳裏に浮かんできた。最近、炭焼き窯跡に出会う機会も徐々に少なくなって、淋しい気もする。



山深い典型的な山村である檜原村の経済は、山仕事にこれまで支えられてきた。江戸時代には人口 100 万人近い大消費地を控えて、炭は鍛冶炭に使ったり、煮炊きや暖房に使われるなど大きな需要があった。今でこそ、村の山地は植林された杉、檜などの針葉樹で覆われているが、かつては檜(なら)、欅(くぬぎ)、樺(けやき)、樅(もみ)、松、栗など炭林が豊かであった。大正末期に杉、檜が植林され出したが、大正初めには薪炭林が 75% もあった。昭和 30 年代に所謂燃料革命によって、電気、石油、ガスに代替されだすに及んで炭の需要が

極端に減少していった。村で炭焼きに従事する人は、当然激減した。例えば、南谷(南秋川流域地域の南郷地区(上・下川乗、柏木野、出畑)の例をみると、昭和の初め 130 戸の内 85 戸で炭を焼いていたが、昭和 50 年頃には 1 戸になった。村全体でも昭和の 40 年代には炭焼で生計を立てている農家は殆どなくなり、現在は一戸もないという(注)。

炭焼きは過酷な仕事である。炭材を伐り、長さを切り揃え、窯に詰めて火をつけ、焼き上がると消火し、窯から出して俵に詰める。炭俵を下まで背負って下す。朝は朝星で家を出て、夜は星を載いて帰る長時間労働である。一日 6 回食べないと体がもたない。炭塵で肺気腫にもなり易かった。村の炭焼きは 10 月から翌年 5 月頃にかけて行い、夏から秋にかけては木材の伐採や搬出の山仕事をして生計を立てた。炭焼き窯は、奥行 12 尺(1 尺約 30 センチ)、高さ 6 尺、焚口方 2 尺位で、床は粘土(窯土)で固め、周囲は石で囲う。伐採して切り揃えた原木を窯の中に積み入れて火をつけ、炭になるまで約 12 時間かかる。白煙が紫色に澄んでくると焼き上がりである。炭は檜を最高とし、次いで良質なのは欅、樺で、ここまですが上炭で、松、栗、樅、杉などは雑炭になる。松炭は刀鍛冶に使われる。窯内消化(黒炭)と窯外消火(白炭)の差があるが、白炭の方が高価である。

俵詰めされた炭は村に「市」がなかったため、その昔(江戸時代)市が立つ五日市まで運ばれ取引された。往路は炭俵を積み出し、帰路は穀類(米、麦)や日用雑貨を購入して戻った。村内で焼かれた炭は馬方によって浅間尾根を通過して本宿に運ばれた。そして荷馬車で五日市に運ばれた。零細な炭焼き人は馬方の駄賃が払えず、女房が馬を本宿まで引いた。炭焼き人は貧乏し、馬方は富み、それ以上に儲けたのは仲買人だと言われた。

江戸時代初期までは伊奈の市(五日市から 4 キロ程先の武蔵増戸駅付近)に出荷されていた。17 世紀末になって五日市が取って代わった。村の人は近い五日市になったと喜んだが、取引が始まると、伊那より遥かに割が悪く、炭は安く叩かれ、買う穀物は吊り上げられた。五日市に炭運上所(税務署)ができた際、代官は炭問屋に買受けを独占させ、その代わりに運上金(税)の取立てを請け負わせた。また穀物屋は穀座を設けて米価を操作し高値で売りつけた。時代劇風に言えば、五日市の奸商と悪代官、悪手代が結託して村を搾取したのだ。村人は塗炭の苦しみに陥った。

村の人々も黙ってはいない。公正を求めて請願を度々重ねた。請願の指導者二人が唐丸籠で江戸に送られ、獄死するという事件が発生した。古文書によると、村の人は二人を頌する石塔を募金(勸化)して吉祥寺門前に建立(文久 2 年、1862 年)したという。その石塔は長い間不明であったが、近年土中から発見された。碑銘と寺の過去帳から二人が獄死した年月日(天明 4 年、1784 年)や名前が確認された。獄死してから約 60 年も経ってから石塔が建立されたのは、お上への気兼ねがあったからだと思われる。

更に興味深い事件がある。慶応2年(1866年)6月13日埼玉上名栗村を発端として民衆一揆が起こった(武州世直し一揆)。一揆の民衆は米の安売りや施金・施米、質地証文・借金証文の破棄を訴え、幾手にも分かれて、飯能、川越、所沢、青梅、田無、日野の豪農、豪商の家などを打ち壊して回った。一揆は16日に五日市を目指してきた。狙われるのは炭屋、米屋である。五日市は檜原村に救いを求めた。強いと定評のある村の農兵や獵師は奮戦し、一揆が五日市に入るのを防いだ。五日市の富裕商人は翌日蔵を開いて安売りをしただけで、村には何らかの形ある恩返しをしなかった由である。村の半数の人は憎い五日市に援兵を送る必要はないと主張したが、お上の命令で助けざるを得なかったという。だとしても、問屋達がすっかり打ち壊された頃を見計らって駆けつけるべきだったと、古老達は後々まで悔やんだと伝えられている。一揆の被害を受けた村は202カ村、結集した民衆は約10万人であったという。また江戸近郊の一揆中最大のもので幕藩体制に与えた衝撃は甚大であった。

炭運搬の話をしたので、敷衍して村の交通事情について触れる。南北両秋川の谷は険しく、谷川沿いの道は岩場が多く危険だったので荷駄の通れる道が発達しなかった。代わって浅間尾根が利用された。浅間尾根には村の炭や物資だけでなく、小河内方面や甲州方面の物も運び込まれ、街道のように賑わった。浅間尾根は馬車道として昭和10年代まで利用された。本宿に乗合バスが通じたのは、第二次世界大戦末期である。その前は五日市の十里木まで乗合バスが通じていたが、十里木から本宿までの間は乗合馬車であった。昭和48年4月に奥多摩町川野と檜原村数馬を繋ぐ約20キロの奥多摩周遊道路が開通し、多摩川と秋川の分水嶺を越えて両町村を連絡する自動車通行ができることになった。昭和61年4月に路線バスが全域に運行されるようになった。



浅間尾根の瀬戸沢には、往時馬方などの休憩所や物資の取次、雑貨問屋などを一手に営んでいたという、江戸時代より14代は続く高橋家が一軒ぽつんとある。幕府直轄林の御林山を巡検に来た奉行もここで休憩をとったという。2014年9月に笹平バス停、松生山、浅間尾根、御前山登山口バス停を歩いた際に、高橋家の人が営んでいる、一軒ぽつんと存在する「そば処みちこ」で休憩した。缶ビール、蕎麦、山菜天ぷらを地元のお爺さんと一緒に食しながら、終戦前までここは炭を運ぶ馬方が休憩をとり、生活用品を購入できるスーパーマーケットのような所で繁盛していた等昔話を色々と伺ったことがある。懐かしい思い出である。

(了)

(注)就業状況(平成30年4月版広報資料) 林業・農業など第1次産業54人、建設・土木など第2次産業276人、観光・交通・役場など第3次産業818人(人口2231人、1181世帯)

参考資料は、「郷土史檜原村」、「檜原村紀聞」、「やさしい多摩市町村の歴史」他